日本における
サッカー審判員育成システムに関する研究

――関東大学サッカー連盟の学生審判員育成に着目して――

青　山　健　太

1．はじめに

近年、特にＪリーグが発足した1993年以降、日本におけるサッカーの競技力は目覚ましい発展を遂げてきた。それはサッカー男女日本代表チーム（以下日本代表）の成績から把握することができる。

男子日本代表は、サッカー世界No. 1を競うFIFA[1)]ワールドカップ（以下W杯）において1998年フランス大会の初出場を皮切りに2014年ブラジル大会まで5大会連続でアジア予選を突破し、本大会に出場し続けている。2010年南アフリカ大会では、国内外における大半の予想を覆し予選リーグを突破し世界ベスト16にまで登り詰めた[2)]。

また、育成年代の23歳以下で構成されるオリンピック代表チームも2012年のロンドンオリンピックにおいて4位入賞という好成績を収めている。

女子日本代表に着目してみると、2011年W杯ドイツ大会で優勝、2012年ロンドンオリンピックでは銀メダルを獲得し文字通り世界1、2位を争うまでの競技力を有している。

W杯やオリンピックのように世界中の人々が注目するサッカーの試合を影で支え大きな役割を担う者がサッカー審判員（以下審判員）である。日本サッカーの競技力向上と呼応すうように日本人審判員も日本代表が出場したW杯すべてにおいて審判員として招聘されている[3)]。まさに選手の競技力向上と優秀な審判員の存在はスピーディー克つスペクタルなサッカーの試合を保障する上で車の両輪といっても過言ではない。

W杯における選手の競技力向上と審判員に着目したとき、大きく注目される機会となったのが、2002年日韓大会である。強豪国といわれるヨーロッパの国々が相次いで敗退した一つの

要因として、審判員の誤審が大きく取り上げられた。

サッカーの審判員は通常、主審、副審、第４の審判員の４人で構成され、選手同様にレフェリーチームとしてゲームをコントロールしている[4)]。

世界トップクラスの審判員４人がチームとして臨むW杯でも誤審が生じた背景には、選手の競技力向上に伴うサッカー競技全体のスピード化が原因として考えられる。一言にスピード化といっても多伎にわたるが、大きな事例が新開発のボールによる選手のキック力、精度の向上や[5)]、有効な攻撃を行う攻撃時間の短縮化などが上げられる[6)]。

事態を重く受け止めたFIFAはそれまで各地域からの推薦のみで審判員を選出していた方法を一新し、審判援助プログラム（Referee Assistance Program ＝ RAP、以下RAP）の実施を決定した。RAPは総額33億円をかけて、FIFAの管轄のもと選出したエリート審判員を、４年間かけて育成し、最終候補者の中から優秀な審判員を選抜していく方法である[7)]。

またFIFAはW杯を担当するトップの審判員の育成だけでなく、年代別W杯[8)]や様々な国際大会において若手の審判員を招聘し、４年後、８年後のW杯で活躍する審判員の育成、いわゆる裾野の拡大にも尽力している。FIFAが選手の競技力向上に対応する為に投じた審判員の育成に対する取り組みは、その傘下の組織である日本をはじめとする各国のサッカー協会やリーグにおいても採用される動きが見られる。

日本においては、常時W杯審判員が誕生しているように、トップの審判員の育成には順調な成果をおさめているといえよう。

しかし現在の日本のサッカーにおいては、競技力向上を推進していく過程でリーグ戦を導入したことにより、審判員の数が不足するなどの審判員を育成するうえで新たな課題が生じている。

そこで、本稿では、まずこれまで日本サッカー界において着目されていた「育成」＝「選手の競技力向上」という発想のみでなく、今後も日本サッカーの競技力向上の一躍を担うであろう審判員の育成システムを明らかにしていく。特に、日本における若手審判員とされる学生審判員の育成に関わる関東大学サッカー連盟の取り組みに着目し、その活動が日本のサッカー審判員育成にどのような形で効果を上げているのかを明らかにするものである。

２．日本におけるサッカー審判員

１）審判員の任務とライセンスについて

①試合中における審判員の任務

日本サッカー協会（Japan Football Association＝JFA、以下JFA）審判委員会は審判員の目標

と重点項目において審判員の目標を以下のように設定している[9)]。

目標：サッカーの魅力を最大限に引き出すよう、試合環境を整備し、円滑な運営をする。

この目標を達成するために、審判員はそれぞれの級（カテゴリー）において様々な努力をすることになる。

サッカーの審判員の任務は、選手が安全でプレーに集中できる環境を整備することである。選手がプレーに集中することによって素晴らしいプレーが生まれ、結果として観客が惹きつけられる魅力的なサッカーが行われることになる。

選手が安全にプレーできる環境を整備する為に、試合中における審判員の役割は、主審、副審、第4の審判員が各自の任務を担当している。各審判員の任務は以下の通りである。

主審は、主にフィールドの中で選手同士の接触に伴うファウルをはじめ、その他競技規則のあらゆる違反の有無を判定する最も重要な任務を担当している。任務を遂行する際に重要となってくる要素が対角線式審判法といわれる主審のポジショニングである。対角線式審判法はサー・スタンリーラウス[10)]が1938年に発明した試合中における主審及び副審のポジショニングである。

対角線式審判法とは図1のように主審Rが、フィールド中央矢印で示した対角線を基本に動

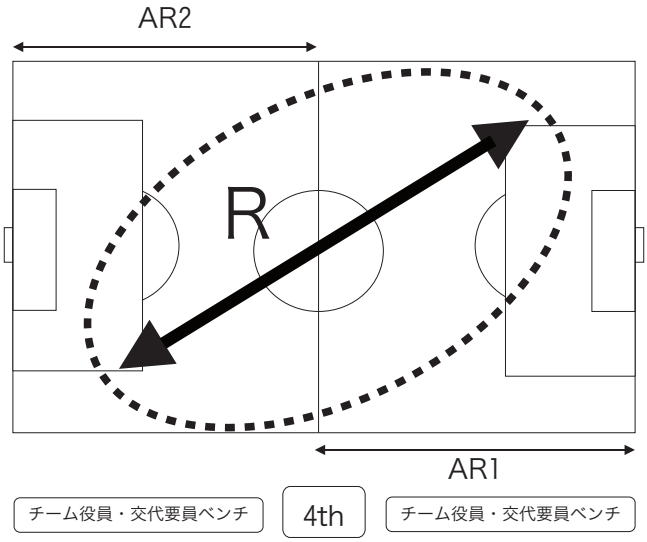

図1　対角線式審判法における主審と副審のポジショニング

く。しかし矢印で示した対角線はあくまでも基本であり、点線で示したエリア内で流動的なボールや選手の動きに対応しながら近くて良い角度のポジョションで判定を行っていく。副審AR1、AR2と争点[11]に対し挟んで監視することからファウルの見落としも少なく、無駄な運動量も減り1試合を通して体力、集中力が確保できる審判法として今日まで採用され続けている。サッカーの1試合の試合時間である90分間において、主審の移動距離は約10〜12kmであるというデータも報告されている[12]。この移動距離は選手ならば試合の中で攻守における重要なポジションのミッドフィルダーに匹敵すると言われている。このことから主審は選手と同等、ポジションによっては選手以上の体力を要することがわかる[13]。

副審は、主にボールがフィールドの外に出たか否かの判断や、得点に関わるオフサイドの監視を担当している。オフサイドの判定は、選手同士がトップスピードで入れ替わる状況が多いため正に一瞬の判断が要求される。図1に示す通り副審AR1、AR2は主審の動きとは異なりタッチラインに沿った直線的な動きに限られる。常にオフサイドラインをキープするスピードや俊敏性が求められている。また、副審の任務はオフサイドの判定も含めて主審を援助することであり、主審が見えにくいファウルに対してフラッグを振って主審にファウルを知らせることもある。

図1に示す通り第4の審判員（4th）は、フィールドの外中央で、両ベンチのチーム役員、交代要員の監視、交代手続きを援助する。また、主審、副審が見落としている重要な誤りを援助できるように常に広い視野で試合を監視する能力が重要である。W杯などの世界規模の大会やヨーロッパリーグでは試合中常に審判員同士が会話できる無線通信システムが導入されている為、第4の審判員はこれまで以上に主審を援助しやすい環境が整ってきている[14]。

②ライセンスの昇級

サッカー審判員の資格はFIFAに加盟している国や地域のサッカー協会によって多少の違いが認められる。日本のサッカー審判員の資格はすべてJFAが統括している。JFAでは図2の示す通り審判員の保有する資格に応じて担当できる試合や役割を定めている。

図2の通り審判員の資格は1級を頂点に4級までピラミッド型を形成している。各都道府県サッカー協会が認定する4、3級審判員にはじまり、各地域サッカー協会が認定する2級審判員、JFAが認定する1、女子1級審判員と昇級していくシステムになっている。1級審判員は日本サッカーにおけるトップの審判員資格であり日本サッカー協会が主催する全国大会規模の試合で主審を担当することが認められている。1級審判員は実績に応じてJリーグ担当審判員や国際審判員に推薦されプロリーグや国際試合を担当することとなる。

4級審判員の資格取得後は、審判員としての経験を積み重ねながらより上級の資格取得を目

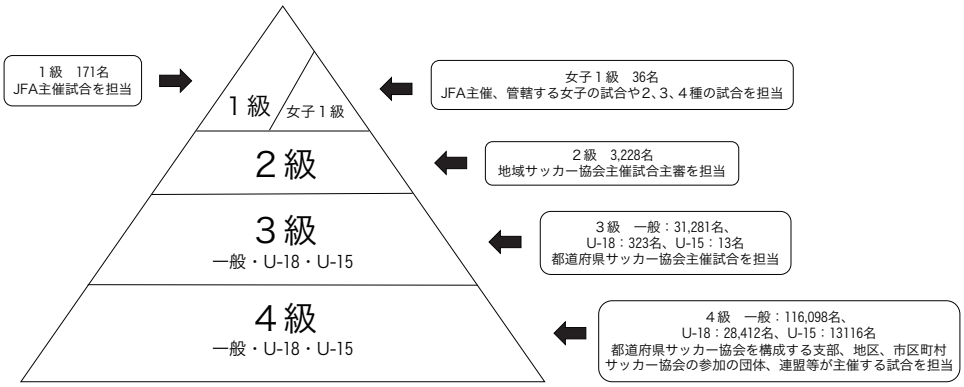

図2　日本における審判員の登録者数及び担当試合
（JFA HP　http://www.jfa.jp/referee/system/ 審判制度概要より作成）

指すわけだが、その登竜門となるのが2、1級試験となる。表1に示すように受験資格を満たす審判員は多数存在するが実際は試合における実技の評価が重視されるため、受験資格を得られる審判員は限られてくる。

特に、2級審判員は、年間を通して1級審判員よりも多くの試合を担当し、各都道府県や各地域の公式戦を支える立場にある審判員である。また全国大会では、主に副審としての役割を果たし、主審と副審の両方の任務を数多く経験する[15)]。

2級審判員になるためには、都道府県サッカー協会が主催する試合の中でも、各カテゴリーの1部リーグの試合や決勝戦など重要な試合を担当する3級審判員が推薦を受けてはじめて2級審判員への昇級試験を受けられる。

1級への昇級試験は、約1年をかけて慎重に実施される。第1次～第3次試験まであり、合格点に満たない審判員はその時点で不合格となる。表1から分析すると2級審判員と同様に各地域協会から推薦された審判員を対象に実技、競技規則、体力テストが実施される。しかし、現状は競技規則、体力テストに関して十分な能力を備えた審判員が推薦されてくるため、主な

表1　審判員認定試験受験資格※

級	受験資格	窓口協会
1	2級審判員または女子1級審判員資格を有する者	日本サッカー協会
女子1	2級審判員資格を有する者	日本サッカー協会
2	3級審判員資格を有する者	地域サッカー協会
3	4級審判員資格を有する者で一定の実績のある満15歳以上の者	都道府県サッカー協会
4	満12歳以上で心身ともに健康な者	都道府県サッカー協会

※石井隆憲、田里千代編著：『知るスポーツ事始め』、明和出版、2010年6月1日、p. 168より作成

選考基準は実技試験となる。

実技試験では、実際の公式戦においてゲームをコントロールする力量が評価される。

試験官には1級インストラクターが配属され、レフェリングに関する評価と指導が行われる。その観点は大きく、判定の的確さと一貫性40点、ゲームコントロール力30点、体力、動き、ポジショニング20点、副審との協力10点という4項目の合計点を10で割った点数が評価点となる[16)]。これらの試験に合格した審判員が1級審判員としてJFAに登録される。

2）リーグ戦の導入による審判員の不足

①公式戦試合数の増加

JFAは、選手の育成と普及を軸に今後の日本サッカーの進むべき道として、「JFA2005年宣言」を発表した。その主な内容は2015年までに日本代表が世界のトップ10に入ること、2050年までに再び日本でW杯を開催しその大会で日本代表が優勝するという目標である。具体的な施策として「競技環境：リーグ戦文化の定着」、「拠点整備」、「U-12年代の重要性の認識、浸透」、「キッズ年代の充実」、「トレーニング環境：指導者の質の向上」をあげている[17)]。

審判員の育成の視点から分析したときに注目すべき箇所は、「競技環境：リーグ戦文化の定着」という提言である。この提言は、これまで日本のトップリーグであるJリーグや社会人、大学などのいわゆる大人のカテゴリーで採用されているリーグ戦方式の大会を、育成年代である子供のカテゴリーにも導入していくことを示唆している。

これまでの育成年代の試合では、全国高校サッカー選手権大会に代表されるようにトーナメント方式の大会が多く見られた。その弊害として、勝ち残ったチームは多くの試合を通して選手として貴重なスキルアップを得られる環境を与えられる事になるが、1回戦で敗退したチームは1試合のみしか全国大会などのレベルの高い試合を経験することができなかった。

そこで、JFAは、実力が拮抗した競技環境を整備する為に、育成年代である子供のカテゴリーにもリーグ戦方式の大会を採用していくことを示した。図3は18歳以下の高校生を対象としたリーグ戦の構造を表したものである。

18歳以下の高校生においては既に47都道府県においてリーグ戦が整備されている状況である。リーグの上位チームは次年度から地域リーグに昇格し、地域リーグの下位チームは都道府県リーグに降格するシステムになっている。その為、トーナメント方式と違い、実力が拮抗したリーグに所属するため毎年必ず一定の公式戦をこなすことができるメリットがある。また15歳以下の中学生を対象としたリーグの整備も18歳以下のリーグをモデルに整備が進んでいる。しかし、リーグ戦方式が採用され各地域における若年層の質の高い試合が急増する結果となった反面、過密日程や運営面での課題が取り上げられている。その中の一つが審判員に関す

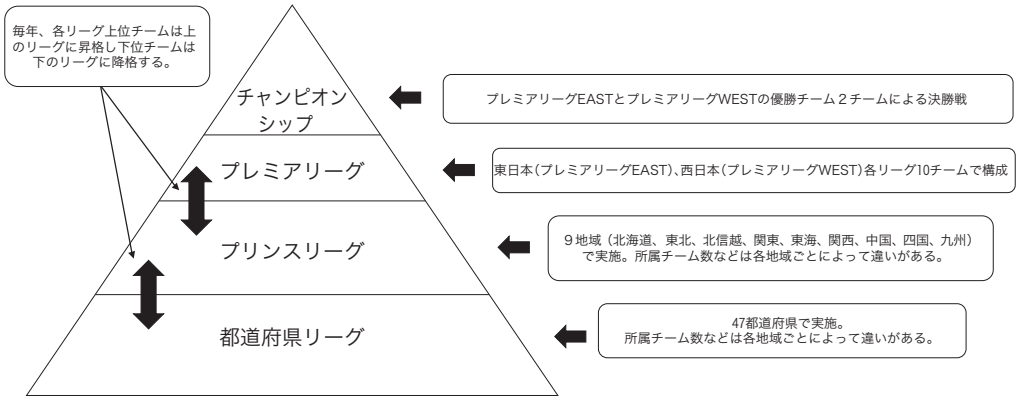

図３　U-18年代におけるリーグ戦の構造
（JFA HP　http://www.jfa.or.jp/match/league/2013/takamadonomiya18/prince/
プレミアリーグ連携図より作成）

る課題である。

②審判員の不足

現状では、各年代でのリーグ戦実施に伴い、審判員数が不足している[18)]。シーズン中における審判員の活動状況に着目してみると、Ｊリーグや JFL といったプロや全国リーグを担当する１級審判員の実働はほぼ100％に近い実働率である。しかし、リーグ戦が導入された18歳以下の地域や県リーグを主に担当する２級審判員の実働率は31％と極めて低い状況である[19)]。１級審判員はＪリーグや JFL での活動が優先される為、なかなか地域や県での実働は困難である。そこで、JFA は選手の育成である技術の部分だけでなく、審判と技術の協調が日本サッカーの競技力向上には不可欠なことから審判員の育成に対して組織的に改革していくことを目指した。

３．JFA の審判員育成

１）JFA 審判トレーニングセンター制度

① JFA 審判トレーニングセンター制度の開設

JFA 審判トレーニングセンター制度（以下審判トレセン）とは、JFA が日本の北海道、東北、北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州（沖縄含む）の９地域を対象に開設した制度である。

審判トレセンを立ち上げた理由として JFA は審判に関わる現在の課題として、①審判員不

足、②審判インストラクター不足、③ JFA 審判指導要領の未浸透を取り上げている。

審判トレセンの参加者は２級審判員と審判員の指導者である２級審判インストラクターである。

従来の審判員の指導は各都道府県、各地域サッカー協会の独自の指導体制に頼っていた。しかし、１級審査を合格できる審判員が少なく日本のトップレベルの試合を担当する１級審判員が不足するという課題が生じていた[20)]。

図４のとおり審判インストラクターも審判員の資格と同様にＳ級インストラクターを頂点に３級インストラクターまでピラミッド型のシステムを形成している。

JFA は審判トレセンを介して、１級審判インストラクターを育成して審判員の指導にあたらせると共に、JFA の考える指導要領を日本全国に漏らすことなく浸透させて、各地域で充実した審判育成を行う環境を整備したのである。

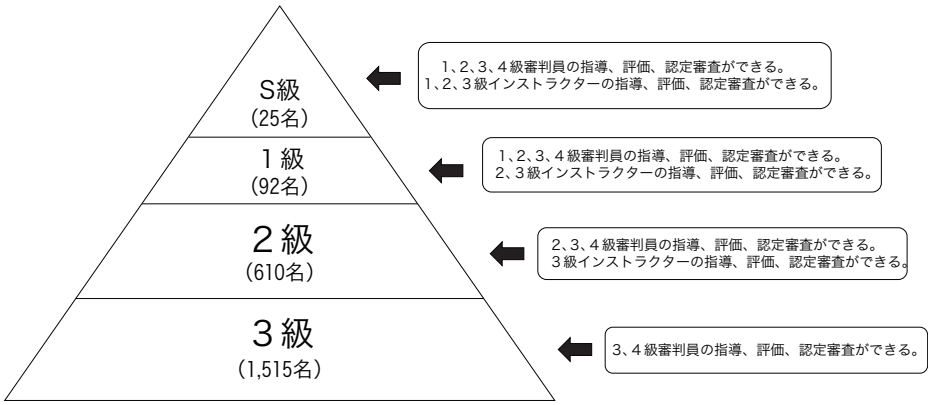

図４　日本におけるサッカー審判インストラクターライセンスと登録者数
（JFA HP　http://www.jfa.jp/referee/system/ 審判指導者（インストラクター）資格より作成）

② JFA 審判トレーニングセンター制度の活動

審判トレセンは、各月１回（１泊２日）の講習会を前期（４～７月）、後期（９～12月）計８回実施するプログラムである。表２は九州審判トレセン活動予定表である。

この表から九州トレセンの詳細な活動内容を分析することができる。活動内容は主に実技と講義に分かれている。実技では試合、プラクティカルトレーニング、フィットネストレーニングを行う。講義はゲーム分析、競技規則の理解を重点においたプログラムが設定されている。審判トレセンが開催される地域や時期によって担当する試合のリーグやカテゴリーの違いは認められるが、JFA の指導要領の浸透を一つの目的としている為全国で統一されたプログラムが

表２　九州審判トレセン活動予定表※

			期間	３月22日（土）～23日（日）	３月７日
開催場所	熊本県熊本市		大会	熊本県総合選手権	
会場／環境	■会議室	会議室、うまかなよかなスタジアム会議室			
	■試合会場	熊本県運動公園スポーツ広場			
	■プラクティカル会場	大津運動公園クレーコート			
	■フィジカル会場	大津運動公園クレーコート			
備品	ビブス（２色×人数）、マーカー（２色×10枚）、ボール（５個） ホワイトボード、プロジェクター、ビデオ、PC				
参加者名	インストラクター				
	審判員				
オブザーバー					

日程の概要			３月23日（日）		打ち合せ	12：00～
時間	３月22日（土）			ホテル会議室	終了予定	16：00
8			8：00～	前日の振返り	宿　　舎	
			8：30～	INSプレゼン　資質向上		
9			9：00～	DIR、INSはコミュニケーション 審判員は準備 ・9：30 MCミーティング		
10		ホテル会議室		熊本県運動公園スポーツ広場	内　　容	
11	11：00～	REF　競技規則テスト	11：00～	ゲーム（80分-PK） 熊本県総合選手権 vs スタジアム会議室	★インストラクターによるプレゼン ・資質向上（15分） テーマ：「　　」（　） ・競技規則（20分） 「第12条ファウル」（発表者は当日指名） ★プラクティカルトレーニング （仕込10分、TR 20分、ディスカッション10分、再TR 10分、まとめ10分） 「手の不正使用」（　　） デモンストレーター ・高校サッカー部11名 ★フィジカルトレーニング 「YOYOテスト」（　　）※九州 FT 指導 ★審判員によるプレゼン 「サッカーはなぜ手をつかえないのか」 （発表者は当日指名） ★ビデオ判定テスト（ダイレクター） ★ビデオクリップディスカッション（ダイレクター） 「中央からの展開」 ★ダイレクターレクチャー 「審判トレセンについて」、「対角線審判法」	
12	12：00～	打ち合わせ				
	12：30～	開講式				
13	13：00～	ビデオ判定テスト	13：00～	更衣・昼食		
	13：30～	INSプレゼン　競技規則				
14	14：00～	更衣・移動　大津運動公園	14：00～	DIRとINS試合分析打合せ		
	14：30～	プラクティカルトレーニング	14：30～	審判員による試合分析 インストラクターによる分析評価		
15	15：30～	フィジカルトレーニング （YO-YOテスト）	15：30～	まとめ		
16			16：00	終了		
17	17：00～	更衣・移動			備　　考	
18	18：00～	夕食　ホテル会議室			■JFADir旅程 3/21　：　熊本空港着 3/23　：　熊本空港発	
19	19：00～	Dirレクチャー				
20	20：00～	審判員プレゼン／INS分析評価				
	20：40～	ビデオクリップディスカッション				
21	21：40	終了				

※JFA ダイレクターより資料提供

採用されている。

実技、講義ともにJFAから派遣されるダイレクターの指導を受けた2級審判インストラクターが審判員の指導を担当する。1年間で規定のプログラムを修了した2級審判インストラクターはテストに合格すると1級審判インストラクターに認定される。同じくプログラムを修了した審判員の中には1級審査に推薦される審判員も誕生することとなる。

また地域トレセンとは別に1年間に2回中央トレセンが実施される。中央トレセンは各地域審判トレセン参加者の中から評価の高い審判員と審判インストラクターが選抜されて召集される研修会である。

表3　審判インストラクター数の年度別推移※

単位（人）

年度	1級	2級	3級	合計
2006	18	450	732	1,200
2007	25	456	862	1,343
2008	84	457	964	1,505
2009	94	486	1,155	1,735
2010	96	532	1,298	1,926
2011	104	551	1,357	2,012
2012	115	578	1,440	2,133
2013	117	610	1,515	2,242

※ JHF　HP http://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/football_instructor.html　年度別登録数より作成

表3は審判インストラクターの年度別登録者数推移を表したものである。2007年の審判トレセンの実施以降、着実に審判インストラクターの数が増加していることがわかる。現在では都道府県審判トレセンも実施されるようになり、審判トレセンが審判員の育成や審判インストラクターの育成に対して一定の成果を成し遂げていると言えよう。

2）JFAレフェリーカレッジ

① JFAレフェリーカレッジの開設

JFAは、世界で通用する審判員を育成する為に「21世紀のレフェリー改革アクションプラン」をうちたてた。この中にはレフェリーの環境整備としてFIFA、AFC[21)]が推奨する審判員のプロ化や、「JFAレフェリーアカデミー」設置などがうたわれている。JFAレフェリーカレッジ（以下レフェリーカレッジ）はその一環として開設された。

レフェリーカレッジのターゲットは、2年間という短期間での集中的な指導、技術や知識の

習得、人間性の育成、30歳未満で将来の日本のトップレフェリー候補者を育成することである。

レフェリーカレッジ生は、各地域から推薦された若手2級審判員を対象に選考試験が実施される。選考試験は第1次〜第4次審査まで実施される。その主な内容は表4の通りである。

表4　JFAレフェリーカレッジ選考方法（予定）※

1次審査	書類審査（一般的な履歴書に加えて、審判歴や選手としての競技歴なども記載）
2次審査	筆記（一般教養、競技規則など）
3次審査	実技（大学交流戦）
4次審査	面接、ディスカッション

※ JFH　HP http://www.jfa.jp/referee/college/application.html
JFAレフェリーカレッジ［主審］養成コース2015募集要項より作成

第1次審査の書類選考では審判員としての経歴だけでなく、選手としての競技歴を記載する欄が認められる。これは、選手の経験を活かした戦術の理解やゲームの流れの把握など審判員として必要な資質の有無が問われているからである。また、第2次審査の筆記テストではサッカーの競技規則テストとは別に一般教養のテストも実施されている。フィールド上で審判員として活動する上でなぜ一般教養が問われるかというと、その理由は主審養成コース2015募集要項から確認することができる。主審養成コース2015募集要項には求める人材としていかの様に記載されている[22)]。

・サッカーを愛し、レフェリー活動に情熱をもっている人
・日頃から高い目標を設定し、常に意欲的に自己改革を図る人
・レフェリーとして活動する環境を自ら能動的に構築する人
・仲間と力を合わせて、レフェリーの社会的地位を高める人

レフェリーカレッジ生には、情熱、向上心を持って審判活動に取り組める人物や、協調性を持った人物を求めていることがわかる。これは審判員として必要な技術だけでなく、競技者や審判員とのコミュニケーションに必要な人間性も問われることから選考試験に一般教養が取り入れられていると考えられる。

レフェリーカレッジ生はその年により多少の人数の上限は見られるが概ね1学年4〜6人程度の徹底した少人数のクラス編成が採用されている。スクールマスターと言われる元国際審判員から実践的な指導を中心に、海外研修など早くから世界のトップ審判員を意識した指導を受講するのである。

② JFA レフェリーカレッジの活動

レフェリーカレッジは原則として土日を中心に年15回開催される定期講習会、オープンカレッジとして年3回開催される地域での講習会、全国大会などを利用した年4回開催される集中講習会で構成されている。

表5はレフェリーカレッジのカリュキュラムの概要である。

まず審判員として必要な知識として「競技規則の知識と適用の習得」という項目が認められる。

審判員はただルールを覚えるだけではなく、実際の試合において競技規則を正しく適用していく必要がある。競技規則の適用とは試合において審判員が競技規則に基づいて試合を運営していくことである。レフェリーカレッジ修了後、即戦力としてトップのリーグで活躍できる審判員を育成してく為であることがわかる。

また、審判員に求められる体力、精神力というところでは、「フィットネスの向上」、「知覚面のトレーニング」、「メンタルトレーニング」、「運動医学・栄養学・生理学・社会学などの科学的知識の習得と実践」という項目が設定されている。

近年のサッカーはスピード化が進み、審判員もサッカーのスピード化に対応するため体力面での強化が求められている。しかし、チームに所属する選手と違いトレーニングや日々の食事をはじめとする栄養管理などは審判員各自の取り組みに依る部分が多いことが現状である。したがって、レフェリーカレッジでは審判員として、各自が心身共に良い準備ができるような知識を身に付ける目的でカリキュラムが設定されているといえよう。

「技術指導者による戦術・システム・プレーヤーの技術などの指導」では、選手を育成する指導者からの情報を習得する機会である。JFA 技術委員会では、日本代表や育成年代における各年代別の日本代表チームの試合を詳細に分析している。分析結果から日本の課題を見つけ出し、育成年代から日本代表まで一貫した指導指針を掲げている。最新の戦術の理解や、日本がどういった選手を育成していくのかを理解して、審判員という立場から日本のサッカーの強化へ貢献していくことも求められている。

最後に特筆すべき項目は、英会話能力の習得である。レフェリーカレッジ修了後は、Jリーグ担当審判員、国際審判員を目指す事が各審判員の目標となる。

審判員は試合中に選手やチームスタッフと適切なコミュニケーションをとることによって試合をスムーズに運営していく能力が要求される。従って、国際審判員として認定されると試合中のみならず、各種の研修会でも英語によるコミュニケーションスキルが不可欠である。その為、レフェリーカレッジにおいても英会話のスキルを身に付けることを意識づけさせて、審判員としてのスキルアップを促していることが理解できよう。

表5　JFA レフェリーカレッジカリキュラム概要※

No.	項　目	内容詳細
1	オリエンテーション	
2	競技規則の知識と適用の習得	変遷の歴史的背景
		競技の精神
		フェアープレー
		第1条～第17条
		実践的審判法（ポジショニング、アドバンテージ、オフサイドなど）
		理解度の確認と報告書の記載方法
		スタンダード
3	フィットネスの向上	形態、機能など個人データの測定
		体力測定
		ランニング（ニッポンランナーズ）
		各種トレーニングの実践（UEFA、FA、AFC など）
4	知覚面のトレーニング	動体視力、視野の拡大
5	メンタルトレーニング	心理テスト、測定と分析
		メンタルトレーニングの実際、予防法と対処法
		カウンセリング、臨床心理
6	運動医学・栄養学・生理学・社会学など科学的知識の習得と実践	運動医学（障害、傷害、脱水状態、リハビリテーション、テーピングなど）
		栄養学（トレーニングと接種栄養素、体脂肪など）
		運動生理学（体力、体組成、筋力、持久力、環境対策など）
		スポーツ社会学（集団・群衆の心理、リーダーシップ、人間学など）
		動作表現学（表情、態度、姿勢など）
		社会常識（テーブルマナー等）
7	技術指導者による戦術・システム・プレーヤーの技術などの指導	技術委員会による提案
		技術指導者からの提言
8	ゲームを活用した実技指導	ゲームによる実技指導
		VTR による自己分析、レフェリング分析
		試合観戦および研修
9	JFA・Ｊリーグのメンバーによる組織・業務などに関する講義	JFA メンバーによる
		Ｊリーグメンバーによる
10	税務の知識	
11	レフェリーマインド養成	レフェリーマインド講座
		ボランティア活動、インターンシップ活動
		外部講師による講演、講義
		ウォークラリー
12	英会話の能力の習得と TOEIC のテスト（年3回）	

※ JFA HP http://www.jfa.jp/referee/college/schedule.html　JFA レフェリーカレッジ日程／カリキュラム例より作成

４．関東大学サッカー連盟における審判員育成について

１）学生の審判員資格取得

①関東大学サッカーリーグ大会方式の変更

大学におけるサッカーを統括する団体は全日本大学サッカー連盟である。全日本大学サッカー連盟の傘下に全国９地域の大学サッカー連盟が形成されている。関東大学サッカー連盟は関東地域における大学サッカーを統括する団体であり主に関東大学サッカーリーグの運営を行っている。

関東大学サッカーリーグの始まりは、1924年にまで遡り、ア式蹴球東京コレッヂリーグという名称で開幕した。初年度における参加チームは１部リーグ６校、２部リーグ６校合計12校で構成され１回戦総当たりのリーグ戦が実施された[23)]。その後も加盟校は33校まで増え、1935年には関東学生蹴球連盟という現在の連盟組織の基礎がつくられた。

戦後1946年にリーグは復興し、年を追う毎にリーグの整備がすすめられていった。1989年には現在のリーグの名称であるJR東日本カップ関東大学サッカーリーグ戦となり、大学スポーツ界で初めての冠大会化が実現された[24)]。これは、関東大学サッカーリーグがサッカーのみならず大学スポーツ界をリードしてきたことと捉えることができる。

近年の関東大学サッカーリーグの大会方式に着目してみると、大きなポイントが二点見受けられる。

一点目は2001年の大会方式の変更である。前年の2000年まで１部リーグ８校、２部リーグ８校による１回戦総当たり（各校７試合実施）方式が採用されていたが、2001年以降前期・後期に分けた２期制（各校14試合実施）が導入され試合数は倍に増えた。

二点目として2005年の参加チーム数の増加があげられる。2005年のシーズンから１部、２部リーグともに12校で構成する大会方式が採用された。これにより各チームの試合数は前年までの１シーズン14試合から22試合となり８試合増加することとなった。

このような大会方式の変更は意図的に試合数を増やす事を目的としている。これは、U-18年代のリーグ戦の導入の目的と同じく、質の高いレベルの拮抗した試合数を増やす事により大学リーグをより良い選手育成の環境に変えていく為の施策であることがわかる。

関東大学サッカーリーグは、純粋なアマチュアのリーグとしては国内でもトップレベルのリーグである。それは、関東大学サッカーリーグから、長友佑都選手[25)]や武藤嘉紀選手[26)]をはじめ日本代表やＪリーグで活躍する多くの選手を輩出していることから理解できよう。

選手を育成する目的で試合数が増加することにより、関東大学サッカーリーグにおいても他のリーグと同じ課題として審判員の確保がとりあげられるようになった。

2000年まで関東大学サッカーリーグに派遣される審判員は主審、副審の3人がサッカー協会から派遣される審判員であり、第4の審判員は関東大学サッカーリーグに所属しているチームから学生の審判員が派遣されてレフェリーチームを構成していた。

その為、関東大学サッカー連盟では、第4の審判員を担当できる3級審判員を毎年試合数に見合った人数（各校4名程度）育成する事を目的として年に1回3級審判員資格取得講習会を開催していた。

しかし、2001年、2005年の大会方式の変更を受け、学生審判員が副審も担当することとなり、より多くの学生に対して審判員資格を取得させる必要が生じることとなったのである。

②インデペンデンスリーグの開設

大学サッカーの特徴に着目してみると、レギュラーとして出場している選手の大半は3、4年生が中心である。2014年関東大学サッカーリーグ1部リーグ前期第1節のスターティングイレブンを分析してみると、スターティングイレブン132人の内1、2年生で出場した選手は37人であり、全体のわずか28％である[27)]。

また関東大学サッカーリーグ1部リーグに登録されている選手の数はおよそ1,400人いるが1試合に各チームが登録できる選手の数は18人である。このメンバー登録数の規定の為1部リーグ全体では1節にメンバー登録される選手の総数は216人となる。このことから関東大学サッカーリーグ1部リーグにおいては毎節、登録している選手の総数およそ1,400人の内15％の選手にしか出場できる可能性が与えられていないことがわかる。

このように、大学のサッカー部に所属はしているが、大半の学生は在学中に公式戦に出場することなく卒業を迎えていた。また、1、2年生からレギュラーとして試合に出場できる選手は少数であるため、選手によっては3、4年生の間の実質二年間のみの出場に限られていたと言えよう。

選手に試合出場の機会を増やす為に、1、2年生が出場する新人戦の実施、各大学では高校生などとの練習試合の実施、一部の大学同士で二軍の選手を中心としたリーグ戦を実施するなどの対策もとられていた[28)]。

関東大学サッカー連盟は、2003年に各大学に所属する選手の公式戦への出場機会を増やす為にインデペンデンスリーグ（Independence League、以下Ｉリーグ）を開設した。

Ｉリーグは学生が主体となって運営されるリーグである。その特徴として、関東大学サッカーリーグに出場していない選手がプレーする環境であること[29)]。一つの大学において3チームまでチームを編成して出場することができること。正規の部活動以外の同好会などのチームにも出場の機会を提供していることなどがあげられる。Ｉリーグが開設されたことにより、公

式戦の試合数は著しく増加し、出場できる選手の数も増加したことは明らかである。

Ｉリーグにおける審判員はすべて学生が担当することとなり、公式戦であることから審判員はJFAの審判員資格を取得する必要が生じた。結果、有資格者の学生審判員が増えることとなり、審判員の育成という面において日本サッカー界に貢献していると言えよう。

また、学生審判員の特徴として年齢が18歳～22歳であり、審判員としてＪリーグなどのトップリーグを目指す上で年齢的に若手である事は、育成対象として注目すべき事である。

２）学生審判員の育成について

①審判実技研修会

関東大学サッカー連盟審判部では、大学の夏休み期間を利用して、審判実技研修会を実施している。例年、３月に４級、11月に３級審判員の資格取得講習会を実施し有資格者の学生審判員を育成している。しかし、資格取得講習会は、講義形式の講習会である為、競技規則の理解を目的とした知識重視であることが課題である。

審判員は実際の試合において、競技規則を正しく適用していく能力が求められる。その為に実際の試合を利用した実技研修会が設けられる事となった。

実技研修会の始まりは、1998年、数名の審判員を対象に大学生の交流戦や新人戦を用いて実施されていた。３級を取得した審判員を対象に行われていたが、全員を対象に実施することは、各大学における実情を踏まえ時間的にも困難であったといえる。

そこで、それらの課題を踏まえて現在では、各大学から必ず１人以上の参加を義務付けている。各大学から必ず参加者を募る事によって、実技研修会で習得した審判員のスキルや最新の情報を各大学に浸透させることが可能となった。

実技研修会は、４泊５日の期間で実施される。実技研修の対象試合は高校生の交流戦である。試合のレベルとしては大学生の交流戦に比べ劣る部分はあるが、参加審判員のほとんどが審判員としての経験が少ない為、審判員として入門レベルの試合には適しているといえる。

交流戦は４つのグラウンドで実施され、各グラウンドに審判員数名と、審判インストラクターを配置する。この配置は試合終了後グラウンドでインストラクターによる試合の振り返りを行い、以後の試合に反映さていく狙いがある。

夜に実施する講義では、各グラウンドで問題となった状況を取り上げて、競技規則と照合し、審判員として正しい対応を確認していく。

昼間試合を担当し、夜は講義というルーティンは、実際の試合における各自の課題を抽出し、次の試合で課題にチャレンジし、克服していくという課題解決型の良い流れを形成していることがわかる。

学生審判員の審判員に対するイメージは必ずしもポジティブなイメージばかりではない。それは、参加審判員に対して研修会参加への経緯を聞いてみると、チームによっては、希望者がいなく抽選で参加者を決定している大学もある為である。

しかし、研修会の最終日を迎えるころには、他大学の審判員との交流も深まり、審判員として意欲的に試合に臨む姿勢が見えてくる。このことは、関東大学サッカー連盟だけの問題ではなく、審判員としての活動にネガティブなイメージが多い日本のサッカーにおいて地道な活動の成果を達成していると言える。

②エリートコースの開設

関東大学サッカー連盟審判部では、２、1 級という上級審判員資格取得を目指す学生審判員を対象としたエリートコースを設けている。

エリートコースは2007年に開設され、指導者は 1 級審判インストラクターや現役の 1 級審判員が担当している。

エリートコースの内容は、講義を中心としたセミナーと、実際の試合を用いた実技研修をメインに実施している。

セミナーは、年間10回開催され[30)]、内容は競技規則テスト、映像を使用したゲーム分析などである。競技規則テストは競技規則の理解という目的もあるが将来受験することになる２、1 級昇級テストへの対策も兼ねている。映像を使用したゲーム分析では、レフェリーカレッジでも実施されている自分が担当した試合に対する自己分析ができるスキルの習得を目的としている。

分析に使用される映像は受講生が担当したＩリーグの試合を中心に使用している。実際に試合中に審判員として下した判定について、正しい判定、間違えた判定を抽出し、一環した判定基準の確立を目指しているのである。

実技研修では普段担当するＩリーグの試合の他に、夏休みの期間に大学生の交流戦を利用した研修会を実施している。

エリートコースの受講生の中から毎年確実に２級審判員が誕生していることから、エリートコースが審判員の育成機関として充実したシステムを構築していることが理解できよう。

また、エリートコース開設以前を踏まえ関東大学サッカーリーグに所属していた学生審判員の中から現在のＪリーグを担当する審判員が誕生している[31)]。この事から、関東大学サッカーリーグにおける若い年代の審判員育成が重要であることが明らかであると言えよう。

5．まとめ及び今後の課題

本稿で、これまで論じてきたものを整理すると以下の通りである。

①日本におけるサッカー審判員は能力に応じたライセンスをJFA、地域、都道府県サッカー協会より認定されている。ライセンスは審判員が1級～4級、審判インストラクターがS級～3級というようにピラミッド型を形成している。

審判員は能力に応じた試合を担当し、審判インストラクターは能力に応じた審判員及び審判インストラクターの評価、指導を担当している。

②JFAは選手を育成する上で実力が拮抗した質の高い試合を多く経験させるために、各年代別のカテゴリーにおいてリーグ戦方式の大会を実施する改革を推進した。

この改革によって、各年代別のカテゴリーにおいてリーグ戦が導入され、試合数が増加し、選手の育成においては成功をおさめている。

反面、新たな課題として、公式戦の試合数が増加したことにより、審判員の数が不足する課題も生じている。

③JFAは審判員の育成の一つしてとして審判トレーニングセンター制度を各地域において施行し、審判員と審判インストラクターの育成を行っている。審判トレセン発足の背景にはJFAの指導要領を各地域に漏らすことなく伝達する要素も含まれている。

また、JFAレフェリーカレッジを開設し、将来、Jリーグや世界の舞台で活躍する審判員の育成も行っている。レフェリーカレッジは少人数、2年間という短期間で集中的に審判員を育成していくという指導上の特徴がある。

④関東大学サッカー連盟における審判員育成に着目してみると、関東大学サッカーリーグの試合数が増えたことや、Iリーグが開設されたことによって多くの学生審判員を育成していくことが課題となった。

3級審判員の資格取得講習会の他に、実技研修会を実施することによって、審判員として必要な試合における実践的なスキルの習得を実施している。さらに、各大学から1人ずつ義務的に参加者を募ることによって、関東大学サッカーリーグに所属するすべての大学に対して審判員として必要な情報を伝達していくシステムを構築している。

2007年からエリートコースを開設し、将来2、1級審判員資格の取得を目指している学生を対象に育成を行っている。エリートコースでは、定期的なセミナーを実施して、各自が担当した試合の映像を使った振り返りを行うほか、実技研修も実施している。エリートコース受講生から毎年確実に2級審判員が育成されている。

⑤関東大学サッカーリーグに所属していた学生審判員の中から、エリートコース開設以前も踏

まえ J リーグなど日本におけるトップレベルの試合を担当する 1 級審判員が多く輩出されている。

以上のことから、JFA の審判員育成、とりわけ関東大学サッカー連盟の取り組みは、審判員を育成する上で確実な成果を残しているといえる。

また、関東大学サッカーリーグに所属している学生を育成していくことは日本における審判員の育成を考える上で重要であると言えよう。

今後の課題として、関東以外の 8 地域の大学サッカー連盟の審判員育成にも着目し、日本におけるサッカー審判員の育成に繋がる課題を紐解いていきたいと考える。

注及び引用・参考文献

1）Fédération Internationale de Football Association の略。日本語では国際サッカー連盟。世界のサッカーを統括する唯一の団体。

2）ラウンド 16 での PK 戦での敗退は FIFA 公式記録上では引き分け扱いの為、総合順位では 32 チーム中 9 位とういう好成績であった。

3）1998 年フランス大会、岡田正義が選出。
2002 年日韓大会、上川徹が選出。
2006 年ドイツ大会、上川徹、廣嶋禎数が選出。
2010 年南アフリカ大会、西村雄一、相楽亨が選出。
2014 年ブラジル大会、西村雄一、相楽亨、名木利幸が選出。

4）現在海外のリーグやW杯などの国際試合では追加副審や、リザーブ副審を任命し 6 人または 7 人の審判員で試合を担当することもある。

5）浅井武、瀬尾和哉、小林修：サッカーボールの空力特性に関する研究、「体育学研究」第 52 巻第 1 号、2007 年、pp. 29–39

6）吉村雅文：サッカーにおける攻撃の戦術について―有効な攻撃のためのトレーニング―、「順天堂大学スポーツ健康科学研究」第 7 号、2003 年、pp. 28–61

7）RAP は「テクニカル」→審判技術の指導と強化、「フィジカル」→体力、走力などのパフォーマンス面の向上、「メディカル」→ケガの予防やケア、「メンタル」→心理面のサポート、「エナジーパフォーマンス」→立ち振る舞いやマネジメント能力、などの 5 部門からなる専門スタッフが審判員をサポートしている。

8）FIFA は選手の育成を目的に 23 歳以下で構成されるオリンピックの他にも 20 歳以下、17 歳以下で構成されるチームによるW杯を各年で開催している。

9）『サッカー競技規則 2014/2015』、公益財団法人日本サッカー協会、2014 年 8 月 1 日、p. 146

10）第 6 代 FIFA 会長。元国際審判員。1938 年サッカー競技規則の改訂に尽力した。

11）サッカーの試合中におけるボールを保持している攻撃側の競技者と守備側競技者の攻防が起こる場所。

12）松崎康弘：『審判目線、面白くてクセになるサッカー観戦術』、講談社、2011 年 1 月 21 日、p. 183

13）石原美彦：日本人サッカー審判員のフィジカルガイドライン作成に向けた基礎的研究、「順天堂スポーツ健康科学研究」第 5 巻第 2 号、2014 年 3 月、p. 6

14）2014年7月無線局免許が交付されたのを受けＪリーグにも導入。
15）『サッカー競技規則2012/2013』公益財団法人日本サッカー協会、2011年8月1日
16）審判員の評価の合格点は8.0点以上が合格である。
17）「JFA2005年宣言実現に向けたロードマップ」：財団法人日本サッカー協会
18）「2009年度JFA-47都道府県協会訪問会議報告」JFA協議資料No. 5
19）審判トレーニングセンター制度（審判トレセン）立ち上げについて（案）、JFA協議資料No. 1①、2006年12月11日
20）JFAは必要な審判レベルの審判員が十分に提供できていないと考えている。1級審判員の必要数は180人。2006年の時点での1級審判員は119人。
21）Asian Football Confederationの略。日本語ではアジアサッカー連盟。アジアのサッカーを統括する唯一の団体。
22）JFA HP　http://www.jfa.jp/referee/college/application.html、［主審］養成コース2015募集要項より作成。
23）『日本サッカーのあゆみ』、日本蹴球協会編、1974年2月4日、p. 73
24）岸野雄三、成田十次郎、大場一義、稲垣正浩編：『近代体育スポーツ年表1800→1997三訂版』、大修館書店、1999年4月1日、p. 271
25）長友佑都（明治大学→FC東京→イタリアチェゼーナ→イタリアインテル）、AFCアジアカップオーストラリア2015日本代表選出。
26）武藤嘉紀（慶応義塾大学→FC東京）、AFCアジアカップオーストラリア2015日本代表選出。
27）2014年関東大学サッカーリーグ1部リーグ第1節公式記録より分析。
28）体育会系リーグ（東海大学、国士舘大学、筑波大学、日本体育大学、順天堂大学、国際武道大学の6校が参加）といわれる2軍の選手が参加するリーグ戦が大学の夏休み期間を利用して開催されていた。
29）関東大学サッカーリーグに出場したことのある選手は関東大学サッカーリーグにおける出場時間によってＩリーグ出場の可否を決定する規定がある。
30）2014年度は4、5、6、7、9、10、11、12、1、2月に開催予定。
31）佐藤隆治（筑波大学卒）、岡部拓人（流通経済大学卒）、山内宏志（東京学芸大学卒）、竹田明弘（日本体育大学卒）以上J1リーグ担当審判員。J2、J3、JFLを担当する者を含めると更に多数である。